



©Akinori Gomi

第193回定期演奏会

2022年11月25日(金) 17:45開場 18:45開演
 三井住友海上しらかわホール
 指揮/小松長生(桂冠指揮者) チェロ/荒井結*
 シューマン:交響曲第2番
 チャイコフスキー:ロココ風の主題による変奏曲*
 メンデルスゾーン:交響曲第5番「宗教改革」

知られざる絶品、そして《火の鳥》の幻想美…とお楽しみいただく本日に続きまして、次回定期(11月25日)には、桂冠指揮者・小松長生の登場です。

マエストロ小松は福井県のご出身、若くしてアメリカでデビューを飾った指揮者ですが、次回定期には、同じく福井のご出身でアメリカ留学…と共通点をお持ちのチェリスト・荒井結さんもお迎えするのは、縁というものでしょう。

アメリカ、ドイツと留学を経て内外の音楽賞を受賞、ソロや室内楽で精力的に活躍する若き俊英は、瑞々しい傑作・チャイコフスキー〈ロココ変奏曲〉で共演。眩しい輝きから深い陰翳まで…大ヴェテラン・小松長生と触発しあう音楽の喜び、これも期待大です。

そして、コンチェルトを挟むのは、シューマン&メンデルスゾーンの傑作交響曲たち。2曲とも実は演奏家にとってなかなか手強い作品もありますが、その音楽の深い力強さと豊かな広がりとは、実に感動的。演奏至難を乗り越えてこそ、高みと喜び…マエストロ小松とオーケストラの誠実な渾身、ぜひ生演奏でご体感を。

◆シューマン、チャイコフスキー、メンデルスゾーン——ドレスデンをめぐる絆

ところで、次回定期で演奏される3曲には、隠れた絆、とでも申しましょうか、気づかれにくい共通点があります。それは〈ドレスデン〉。

旧・東ドイツの古都ドレスデンは、ザクセン宮廷の栄華と共に豊かな音楽文化も誇ってきた街です。エルベ川の河畔に広がるドレスデンの街には、宮廷楽団の伝統を今に受け継ぐドレスデン国立歌劇場管弦楽団(なんと創立470年以上、ウェーバーやワーグナーも楽長を務めた名門中の名門)をはじめ、豪華な宮廷文化が花ひらいてきました。

——宣伝めいて申し訳ないのですが、昨年発売された『耳旅〜ドイツ・ドレスデンの魅力』[キングレコード]というCDシリーズ・全5枚それぞれ、歴史・文学・美術・建築…とさまざまな視点からドレスデンと音楽、そして文化とのかかわりをエッセイに書かせていただいております(実はVol.2以外のジャケット写真も、わたくしが現地で撮ってきました。ほんとうに歩いていて飽きない、美しい街なのです!)。ドレスデンにまつわる作曲家たちの作品を集めたシリーズですが、なかでも特に重要な存在感を占めているのが、波乱の人生のひとつ、この街で実り豊かな創作の季節を過ごした作曲家、ロベルト・シューマン(1810~56)。そして、次回定期では、彼がここドレスデンで作曲した交響曲 第2番をお聴きいただけます。

◆心の危機を克服して——シューマン〈交響曲第2番〉にみなぎる美しい力!

シューマンは若い頃、やはり音楽文化も盛んなライプツィヒ(バッハやメンデルスゾーンなどゆかりの作曲家も多い商業都市です)で活躍をはじめ、作曲に評論にと音楽界の闘士として猛然と突き進んでいたのですが、もともと繊細なひとであったこともあって、精神的な重圧で疲労困憊してしまいます。

そこでシューマンは心機一転、すべてをリセットして心おだやかに音楽と向き合おう…と、ライプツィヒから東南にほど近い古都・ドレスデンへ拠点を移します。やはり華やかな文化の薫るイタリアの花の都になぞらえて〈エルベのフイレントツェ〉とまで言われたドレスデン。この街で傷ついた心を癒したシューマンが、名作・ピアノ協奏曲 イ短調に続いて書き上げたのが、この交響曲 第2番 ハ長調(1846年完成)。これもまた充実きった傑作です。

同じシューマンの交響曲でも、第3番《ライン》のような愛称がついていないので、初めてのかたには取りつきにくい印象があるかも知れませんが、ご安心を。聴いてみると、その力強くも壮大な、美しい力のみなぎる音世界には、自然に惹き込まれて熱中してしまはず。

とりわけフィナーレ!——藤本一子「作曲家◎人と作品 シューマン」[音楽之友社、2008年]にも、この曲の終楽章について、こう記されています。「行進曲風の主題が、途中から織り成すように入ってきた賛歌風の旋律に入れ替わられることによって、交響曲全体が世俗的な音楽から、あたかも宗教的な次元に転換されている。その音楽のプロセスはシューマン自身の危機の克服にも重ねられる」

音楽の宗教的なまでの豊かな広がり、そこにみなぎる〈克服〉の力…。ぜひ、ご体感を。

◆古都とロココとモスクワと——〈ロココ風の主題による変奏曲〉の華麗な輝き

何百年もの伝統に磨かれた宮廷オーケストラを擁したドレスデンには、未来をめざす若い才能も集まって多くを学び、巣立ってゆきました。そのひとりが、若き日にこの地で学び、ドレスデン宮廷管弦楽団の奏者としてキャリアを始めたチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン(1848~90)という名手です。

やがて彼は、ロシアに創設されて間もないモスクワ音楽院へ教授として招聘されます。以来、彼はソリストとしても盛んな活躍を繰り返して、ロシア音楽の発展にたいへん大きな影響を残すことになるわけですが…そこで出逢ったのが、モスクワ音楽院の同僚でもあった作曲家、ピョートル・チャイコフスキー(1840~93)。

名手は、名曲を生みます。チャイコフスキーは、名匠フィッツェンハーゲンのために…と、次回定期でお聴きいただく〈ロココ風の主題による変奏曲〉作品33を書いたのです(1877年初演)。

ロココとは、18世紀フランスから大流行した美術の様式ですが(バロックの重厚に比べて、ロココのほうが優美で軽快、洗練された装飾が特徴です)、チャイコフスキー自作による〈ロココ風の主題〉から、チェロの華やかな独奏を中心に歌も豊かな変奏が繰り返されてゆく、という素敵なコンチェルトです。

ところが——作曲家から楽譜を受けとったフィッツェンハーゲン、「こちらの方が演奏効果があがるだろう」と勝手に変奏の順番を入れ替えたうえに、原曲の第3変奏をカット。それで初演してしまったものですから、チャイコフスキーは大いに憤慨。しかし、各地で大成功を収めてしまい、怒りを通り越して呆れてしまった作曲家は、フィッツェンハーゲン改訂版のまま出版されても何も文句を言わず…原典版楽譜が日の目をみるのは、没後何十年も経ってからでした。

聴き比べてみると、申し訳ないですが、改訂版のほうが演奏効果は華やかな気も…というわけで、次回定期では、広く馴染まれているフィッツェンハーゲン版で演奏されますので念のため。

◆揺り動かされる深い感銘…メンデルスゾーン《宗教改革》交響曲の至美!

さて、次回定期の後半でお聴きいただくのは、シューマンの親友にして良き理解者でもあった、フェリックス・メンデルスゾーン=バルトルディ(1809~47/ふつう二重姓の後半は省略します)が作曲した傑作・交響曲 第5番《宗教改革》です。

愛称はいかめしいですけど、美しいエネルギーのみなぎり疾走する、その昂揚感とフィナーレへ向けた壮大な広がり…、まさに、先のシューマンの交響曲 第2番とも見事に呼応する作品。並べてお聴きいただいでこそ、両作品の意義や魅力もさらに深まること間違いなし!というわけです。

若いメンデルスゾーンが書いた交響曲 第5番 二短調 作品107《宗教改革》(1830年脱稿/32年改訂)は愛称の通り、キリスト教のローマ・カトリック教界で変革運動がおこりプロテスタンティズムを生んだ〈宗教改革〉と縁のある作品です(メンデルスゾーンはユダヤ系ですが、キリスト教のルター派に改宗したプロテスタントです)。

彼がこの曲を書いたのは、〈アウクスブルク信仰告白〉(1530年、カトリック諸侯の承認を求めて発表された文書)から300年を記念した祭典が行われるのに合わせてのことでした。そんなわけで、コラル(讃美歌)のメロディもあれこれ織り込まれているのですが、それ以外にも、舞曲風の音楽にも心すみわたるような純朴さが美しいスケルツォ、さすがメンデルスゾーンという緩徐楽章の歌心(短くも美しいこと!)など、聴きどころ満載。そして終楽章の冒頭、木管楽器が敬虔にうたうコラル《神はわがやぐら》(宗教改革の中心人物ルターが作曲)から広がってゆく音楽の壮大さ…。

ところで、次回定期の隠れたテーマ〈ドレスデン〉はといえば…第1楽章の冒頭でオーケストラが静かに深く祈りを捧げるような美しい場面があるのですが、ここで現れるのが《ドレスデン・アーメン》と呼ばれる古い讃美歌なのです。

これは、17世紀頃からドレスデン宮廷礼拝堂で用いられるようになった伝統的なメロディ。後に、ワーグナーの傑作《パルジファル》にも〈聖杯の動機〉として現れるので、あれこれお聴きのかたは、さまざまな記憶も重なり合って感銘広がる…というわけですが、詳細は当日の楽曲解説にお譲りするとして、古都をめぐる縁で結ばれた3つの傑作たち、ぜひホールでご一緒に!

やまの たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。



Profile